巻 頭 言

－平成15年は改革の年－

院長 小 熊 豊

平成14年は不況にあえいだ1年でした。

聖域なき構造改革の旗のもと、医療の分野でも様々な医療制度の変更が行われようとしています。全国大学・国公立（公的）病院の統廃合、独立行政法人化、包括制度の導入、基準病床数の算定と病院の機能分化、医師の卒後研修制度の改修、老人医療費の抑制と自己負担額の引き上げ、診療報酬の引き下げなどであります。更に老人保険制度自体の変更も検討されています。その根底には医療費の抑制、医療財源の確保、医療資源の効率的活用が意図されていると思われます。一方、医療事故・トラブルの報告が急増し（マスコミの取り上げ方にも問題がないわけではないと思いますが）、個人の権利意識の高まりもあって、安全で効果的な、患者の意思・権利を重視した質の高い医療の実践が強く求められています。

砂川市立病院でもこうした動きに対応して、様々な取り組み、検討が続けられており、これからも益々変革する必要性があると考えています。近い将来の新病院建設を待っている余裕はなく、現時点から積極的に改革に取り組まねばなりません。そういった意味では、昨年は職員皆様の実行力が形となって発揮された年であると実感しています。平成15年度は病院にとって改革の年と言っても良いほど、多くのシステムの変更を企画しており、多いに皆さんのやる気に期待をしている所であります。

ここに砂川市立病院医学雑誌第20巻が刊行される運びとなりました。これは昨年1年間の関係各位の汗と努力の結晶であり、貴重な症例、業績の発表の一端であります。皆さんの日夜を分かたぬ努力に、深甚の謝意を表したいと思います。

これからも地域に根ざし、地域のニーズに適応した専門的医療、EBMやICの徹底した、患者・家族との間に心の通った医療を目指したいと考えています。

職員皆さんの更なる奮闘を喚起して、巻頭言にかえさせていただきます。